

トマト

井口昭久

庭に植えたトマトの茎が伸びて葉は緑の茂みを作っていた。緑の中に真っ赤なトマトがなかった。丸いトマトは赤、青、黄色と変わる信号の赤に似ていた。

庭に水をやりながらトマトを食べた。子供のは、いつももぎ立てのトマトを食べた。夕立が来そうな午後には畑からトマトを取ってきて清水につけて食べた。トウモロコシも同じ時期に穫れた。私は飽かずにトウモロコシを食べて母親を困らせた。怒った母は私を蔵に入れた。「コメに小便をかけるぞー！つて叫ぶとクラから出してくれるよ」と幼友達のマサル君が教えてくれた。その頃の農家の蔵

の中には家族が1年分食べる米が貯蔵されていた。

土臭いトマトを食べると、30年前に57歳で死んだ母のことが浮かんだ。

母は私がニューヨークに留学しているときに亡くなった。

1970年代のニューヨークは安全ではなかった。ことに私の勤めていた病院のあるハレムは犯罪の街であった。

病院の周辺は、無人となったコンクリートの建造物が多く空き地が目立っていた。荒れたビルの階段に座った黒人が所在無げに煙草を吸っていた。

私は毎日5番街をバスに乗り、研究所のある病院へ通った。郊外のわが家へ帰り着くと、戦場から帰還した兵士のような安堵感を覚えた。5番街はニューヨークのマンハッタンの真ん中を走る道路である。摩天楼と呼ばれる巨大なビル群の中を一直線に走っている。5番街には一流デザイナーが作った衣装の並ぶシヨウウインドーや、美術館などが軒を並べていた。世界中の人が集まり人種のるつぽと呼ばれていた。

しかし「グッチ」などの宝石店の並ぶ華やかなマンハッタンはセントラルパークの中ほどまでで、そこを過ぎると殺伐とした街になった。

その頃のニューヨークでは予算不足で、道路もバスも傷んでいた。肥満の女性が乗り込むバスが大きく傾いた。

5番街はセントラルパークの脇を走りハレムへ抜けていた。セントラルパークに植えられた周囲の葉緑樹の枝が伸びて5番街には

み出していた。信号機が緑の葉っぱ

を背景にして点滅

していた。緑の中にくっきりと赤の

信号が視界の末まで点いては消えた。

ニューヨークへ渡って1年が過ぎた頃、夏が終わり、

まだ秋が始まっていないときに母の余命が短いことを知った。

それ以来、私は日本に置き去りにしてしまった母の病状の進行に怯えていた。5番街をバスに乗り家路に着くときに、緑の中に灯る真っ赤な信号が涙でトマトのように見えた。

公園では黒人の子供たちがサッカーで遊んでいた。乾いた声が乾燥した夕暮れに散乱していた。



犬張り子

(愛知淑徳大学教授・名古屋大学名誉教授)